

第10章 組織は労働組合とどのように関わるのか

演習問題

- ① 日本の労働組合の特徴と直面している課題についてまとめてみましょう。
- ② 全国レベル、産業レベルの労使それぞれの団体のウェブサイトを開覧して、各団体の活動内容を比較してみましょう。
- ③ 経営者が労働者（労働組合）とコミュニケーションを確保して、協調的な労使関係を築くことは普遍的に経営に役立つのでしょうか。それとも、業種や規模、国や地域、時代背景などによって、それは異なるのかどうかについて考えてみましょう。

さらに進んだ学習のために

- 〔1〕 奥井禮喜 [2016] 『帝国ホテルに働くということ——帝国ホテル労働組合七〇年史』 ミネルヴァ書房。
華やかなイメージの強いホテルと労働組合というと、不釣り合いに感じるところがあるかもしれませんが、1890年開業の帝国ホテルでの労働組合活動の取り組みが記された書物です。組合員へのインタビューに基づく本書からは、最高のサービスを届けるために働く人たちの矜持とともに、そのためのよい職場づくりに向けた不断の努力がひしひしと伝わってきます。労使関係のみならず、組織設計、職場のマネジメントの視点で読んでみても得るところが多いでしょう。
- 〔2〕 小池和男 [2018] 『企業統治改革の陥穽——労組を活かす経営』 日本経済新聞出版社。
2019年に鬼籍に入られた碩学による本書は、「わたくしの最後の本となる。」という一文からはしがきが始まります。コーポレートガバナンスにおいて、従業員代表の経営への発言を重視する、労組を活かす経営が、過去の調査データの再吟味や複数の事例をとりあげながら説得的に論じられています。現状分析ではなく、戦後の時代を通観して分析がなされており、特に若い読者には新たな発見が多く得られるものと思われます。
- 〔3〕 仁田道夫・中村啓介・野川忍 編 [2021] 『労働組合の基礎——働く人の未来をつくる』 日本評論社。
連合 [2023] によると、労働組合について「知っている」人の割合は90.5%となっています。しかし、「何をどのくらい知っていますか」とさらに問えば、答えに窮する人が多いのではないのでしょうか。本書では、経済学、法学、経営学など異なる領域の研究者や実務家が、労働運動の歴史、法律、雇用・労働条件や政策闘争、さらには世界の労働運動を論じています。この本をガイドに労働組合発見の旅に出てほしい、と著者らは記していますが、本書を通読すれば、その旅は大変面白いものになることは間違いのないでしょう。

演習問題の出題意図と解答のポイント

- ① 2-2, 3-1~3を中心にまとめてみましょう。

また、これらの特徴と課題との間にはどのような関係があるのかについても考えてみましょう。本書でも触れられているとおり、日本の労働組合の特徴の1つである企業別組合という組織形態は、日本的経営の「三種の神器」の1つに数えられていました。労働組合のあり方が変わることが日本の経営に与える影響はあるのか、あるいは逆に、日本の経営のあり方が変化することによって労働組合も変わっていくのか、という大きな問題について考えてみるのもよいでしょう。

- ② 各種団体のホームページには、設立の趣旨など、その団体がなぜ存在し活動しているのかを述べているページがあります。まず、その点について労使複数の団体を比較してみましょう。それによって、労使（労資）関係というとらえ方がなぜ成立するのかを感じてもらえるでしょう。さらに、各団体の年度目標や活動について調べてみると、労使間ではもちろん、使用者団体、労働者団体それぞれの中でも違いがあることに気づくかと思います。なぜ、そうした違いが生じてきているのかを考えてみましょう。

- ③ 本文中にも示したとおり、健全な批判者としての労働組合の存在は経営に役立つものと考えられますし、労使間の対立が少ないことはさまざまな面でのコスト削減にも役立つことは事実でしょう。しかし、いつでもどこでもそう言えるのかを考えてもらおうというのが設問の意図です。

紙幅の関係もあり、各国の労使関係については触れることはできませんでしたが、欧米の文献では、「them and us(奴らと俺たち)」という表現が散見されることからわかるように、必ずしも協調的な労使関係とは言えないような状況もあります。そうした国々でも協調的な関係を築くべきなのか。国内に限っても、業種によって違いは必要ないのか。同業種でも、社長が従業員全員の顔と名前を把握できるような規模の会社と、到底それが無理なほどの従業員を抱える会社とで違いはないのか。例えばこうした点から、対立するよりは協調するほうがよいという一般的な常識を疑ってみる姿勢で考えてみてください。